

震災と原発事故から13年、福島で、こころの病が多発していた

2026 3/20 (金・祝)

新横浜 スペース・オルタ

開場 12:30 開演 13:00

上映時間 113分

# 生きて、生きて、生きる。

アフタートーク 上映後約 60分

監督・撮影・プロデューサー 島田陽磨

精神科医 蟻塚亮二

精神科認定看護師 米倉一磨

保育士 阿部智明

保育士 門間貞子

司会/精神科医 竹内真弓

主催 | 教育・芸術・医療でつなく会

問合せ 10tsunagu@gmail.com

入場無料

定員 100名 | 予約が必要ですが  
申し込み | Peatix →



SINCE 1989  
Leet-way  
FROM AMERICA  
-PRODUCE-

< World Media Festival 2025(ドイツ)ドキュメンタリー部門で銀賞受賞! >

制作・監督・撮影：島田陽磨（「ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん。」）

撮影：熊谷裕達 西田豊 前川光生 編集：前嶋健治 音楽：渡邊崇

助監督・撮影・宣伝美術：鈴木響 オンラインエディター：中田勇一朗 効果・整音：高木創

協力：メンタルクリニックなごみ

NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会 相馬広域こころのケアセンターなごみ

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業） 独立行政法人日本芸術文化振興会

製作・配給：日本電波ニュース社 2024年 / 日本 / 113分 / カラー / ドキュメンタリー

喪失と絶望の中で生きる人々とともに生きる医療従事者たちの記録

アフタートーク出演者プロフィール

島田陽磨 (撮影・監督・プロデューサー)

1975年生まれ。早稲田大学教育学部生物学専修卒業。探検部在籍時に起きたアマゾン川部員殺害事件で取材を受けたことをきっかけに日本電波ニュース社に入社。テレビディレクターとして、2003年のイラク戦争など国内外の報道やNHKなどのドキュメンタリー作品を数多く手掛ける。「二つの戦争・翻弄された日本兵と家族たち」(2015年朝日放送)で坂田記念ジャーナリズム賞。「ベトナム戦争40年目の真実」(同)でニューヨークフェスティバル ワールドベストテレビ&フィルム入賞。三度の訪朝取材をもとに北朝鮮と日本に引き裂かれた姉妹の58年ぶりの再会を描いた「ちょっと北朝鮮まで行ってくけん。」で第76回毎日映画コンクールドキュメンタリー部門ノミネート、World Media Festival 2023 ドキュメンタリー部門(Human Concerns)金賞、ニューヨークフェスティバル 2023 ドキュメンタリー部門(History & Society)銀賞、US International Award 2023 ドキュメンタリー部門(History & Society)銀賞など。本作の短編版『Live.Live.LIVE』で、Tokyo Docs 2023 ショートドキュメンタリー・ショーケース最優秀作品賞。

蟻塚亮二 (精神科医)

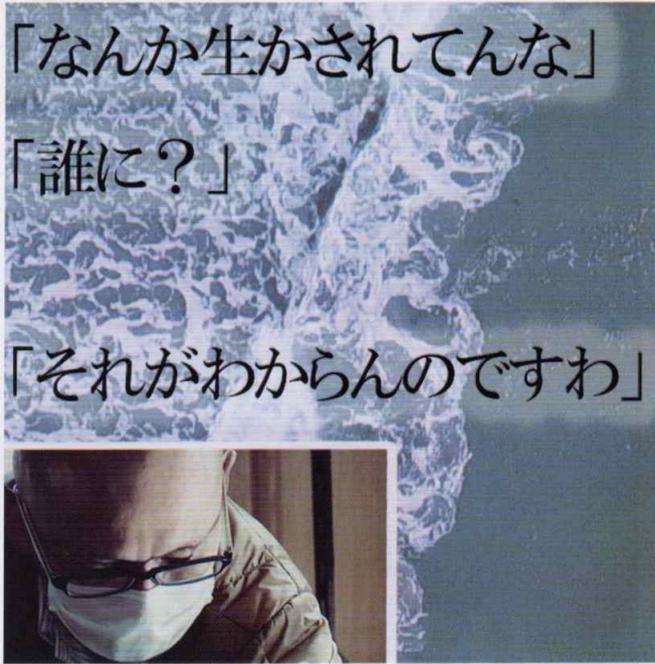
1947年福井県生まれ。中学生の時に東京オリンピック(1964)強化指定選手(水泳)に選ばれる。弘前大学医学部卒業。1985年から1997年にかけて青森県弘前市の藤代健生病院院長。2001年、精神保健功労にて青森県知事表彰。その後、2004年から13年まで沖縄県那覇市の沖縄協同病院などに勤務。2013年から福島県相馬市の「メンタルクリニックなごみ」院長を務める。現在も月に一度、沖縄での診察を続けている。

著書に『うつ病を体験した精神科医の処方せん』(大月書店 2005年)、『統合失調症とのつきあい方』(大月書店 2007年)、『沖縄戦と心の傷 ト라우マ診療の現場から』(大月書店 2014年 沖縄タイムス出版文化賞 2015)、『戦争とこころ』(沖縄タイムス 2017年、分担執筆)、『助けてが言えない』(日本評論社 2019年、共著)『戦争と文化的トラウマ』(日本評論社 2023年、分担執筆)、『悲しむことは生きること〜原発事故とPTSD〜』(風媒社)など。

米倉一磨 (精神科認定看護師)

1973年福島県南相馬市生まれ。航空自衛隊、陸上自衛隊を経た後、看護専門学校卒業(看護師免許取得)、福島県立医科大学大学院看護学研究科(精神看護学領域)修了。南相馬市内の精神科病院勤務時に東日本大震災と原発事故が発生。自らも被災しながら被災者や地域住民たちの心のケアをするため、福島県立医科大心のケアチーム(災害後の医療チーム)へ参加し、後に引き継がれるNPOの立ち上げに加わった。さまざまな住民の訪問や支援者への支援、心の啓発など幅広い心と体のケアを行っている。現在「NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会 相馬広域こころのケアセンターなごみ」センター長。

著書に「災害看護と心のケア〜福島『なごみ』の挑戦〜」。共著書に「福島原発事故がもたらしたもの〜被災地のメンタルヘルスに何が起きているのか」など。



阿部智明 (保育士)

栃木県の創造の森保育園でシュタイナー教育に出会い学び始める。子育て中に始めた自主保育を経て2007〜2022年までシュタイナー保育園ねっこぼっこ園を宮城県で主催した。シュタイナー幼児教育教員養成講座を受講中に東日本大震災で被災。その時アントロポゾフィーのトラウマケアを体験し、つなぐ会のメンバーとして現在に至る。3年前より療育施設に勤務しながら治療教育を学んでいる。

門間貞子 (保育士)

1996年、シュタイナー幼児教育の実践を目指し、福島市内に保育園を立ちあげ。福島第一原発事故によって、園児の9割以上が県内外に避難、国内外から支援を受け再生を目指すも力尽きその4年後に閉園、首都圏に移り住む。震災以降の引越しは5回。かつて中退せざるを得なかったシュタイナー幼児教育者養成コースで学びなおす機会を得、現在もシュタイナー園で働く。また、2012年にNPO法人を立ち上げ、年に2回のペースで、福島の子どもたちに手仕事のワークショップを開いている。

「人間もつと泣かなきゃだめだと思う」

震災と原発事故から13年。福島では、時間を経てから発症する遅発性PTSDなど、こころの病が多発していた。若者の自殺率や児童虐待も増加。メンタルクリニックの院長、蟻塚亮二医師は連日、多くの患者たちと向き合い、その声に耳を傾ける。連携するNPOこころのケアセンターの米倉一磨さんも、こころの不調を訴える利用者たちの自宅訪問を重ねるなど日々、奔走していた。

津波で夫が行方不明のままの女性、原発事故で避難中に息子を自死で失い自殺未遂を繰り返す男性、避難生活が長引く中、妻が認知症になった夫婦など、患者や利用者たちのおかれた状況には震災と原発事故の影響が色濃くにじむ。

かつて沖縄で沖縄戦の遅発性PTSDを診ていた蟻塚医師は、福島でも今後、同じケースが増えていくのではと考えていた。

ある日、枕元に行方不明の夫が現れたと話す女性。「生きていていいんだ」という希望を持った時に人は泣ける」と蟻塚さんは話す。米倉さんは、息子を失った男性にジーンズカンを一緒に焼くことを提案。やがてそれぞれの人々に小さな変化が訪れていく。

喪失感や絶望に打ちのめされながらも日々を生きようとする人々と、それを支える医療従事者たちのドキュメンタリー。

入場無料 / 要予約  
予約 / Peatix ↓



当日タイムテーブル  
12:30 開場  
13:00 - 15:00 映画  
15:00 - 15:30 休憩  
15:30 - 16:30 トーク

つなぐ会 HP ↓

